

【成果報告】

1. 研究目的

青山学院は英語教育の諸問題を解決するために、青山学院英語教育研究センターを 1998 年に設立し、「青山学院 4-4-4 一貫制英語教育」を構想し、我が国初の「4-4-4 一貫制英語教育シラバス（日英）」、「青山学院語彙リスト（AVL）」、「4-4-4 一貫制英語教科書『SEED BOOKS』（全 12 巻）」、「青山学院 4-4-4 一貫制英語教育に資する青山学院 CAN-DO リスト（日英）」の開発を行い社会に公表してきた。さらに、2017 年度-2018 年度は、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠) 対応の「青山学院 4-4-4 一貫制英語教育に資する異文化間能力育成のための指標作成」に着手し、その試論的成果を全国英語教育学会第 49 回弘前研究大会で発表した。外国語教育の目標は、主に、CEFR を指標とする「言語運用能力の育成」と CEFR の補完として作成された FREPA(言語と文化の複元的アプローチ参照枠)を指標とする「異文化間能力」の育成に収斂されると考えられる。本調査研究は、「異文化間能力育成」に SDGs 教育を組み込むことの可能性を学習者サイドから見た興味関心という視点から探り、最終的には、初中高大連携英語教育に資する SDGs 教育の提案（内容と方法）を行うものである。

2. 調査研究方法

質問紙票によるアンケート調査を行った。SDGs17 項目の内、興味関心のある項目（最も優先して到達すべき目標）を 6 つ選ばせ、重要度が高いと思われる順番に 1, 2, 3, 4, 5, 6 の数字を項目の最後に設置し（ ）に記入させた。また任意で、17 の項目以外で重要だと思う項目を第 18 番目（あなたの掲げる目標）として自由に記述させた。

調査対象は、初等部（5 年・6 年）・中等部（1 年・2 年・3 年）・高等部（1 年・2 年・3 年）・大学（英米文学科（人文系）・社会情報学部（理系：文理融合） 合計：1274 名。

分析にあたっては、基礎データを構築し、各部各学年の「上位 6 位に選んだ目標の合計数」を表に纏め「17 項目の分散」をグラフで示した。また第 18（あなたの掲げる目標）を学習者のことばをそのまま用い各部各学年毎に整理した。また、(北村、2019) を参考に 4 象限分類（第 1 象限：教育、第 2 象限：保健・健康・衛生、第 3 象限：環境・資源、第 4 象限：経済開発分野）を行い、各部各学年の関心の対象がどの分野にあるかについて分類・分析を行った。さらに、量的分析を試み、全体の分析、所属毎の分析、所属間の比較を行った。調査結果の詳細については本研究報告書（全 106 頁）をご覧ください。

3. 今後の課題

学習者の SDGs への興味関心の対象と度合を考慮した学習者の異文化間能力育成につながる英語教育の内容と方法の提案を行うことが今後の課題になるが、SDGs17 の項目（ゴール）は相互補完的に関連し合って成り立っているため包摂的な解釈が必要となる。個々の項目（ゴール）を意識するのみならず、全体像として把握し、それぞれが相互に繋がっているという認識を育てることが教育上重要となる。よって今後は、教科横断型のカリキュラムの開発と同時に英語教育を課題解決能力育成に資する「応用言語学（Applied Linguistics）」の枠組みに位置づけた理論研究と実践教育の成果が期待されることである。

る。SDGs のテーマを CLIL(内容言語統合型学習)で行うことの可能性の追究が鍵となろう。

本研究は、青山学院大学総合研究所 SDGs 関連研究補助制度の支援を受けたものである。
採択頂いた青山学院大学総合研究所と御支援頂いた学院内外の関係者に衷心より御礼申し上げたい。

木 村 松 雄

青山学院大学文学部英米文学科教授

青山学院英語教育研究センター所長

2021 年 3 月 26 日